

文科省選定保存技術(瓦葺き)保持者(本瓦葺き) 山本瓦工業(株) 代表取締役社長 日本伝統瓦技術保存会 会長

山本

YAMAMOTO
Kiyokazu

清一

さんに聞きました



聞き手
溝利利明
編集委員

[writer] 駒崎文男

家業の瓦葺きから 文化財社寺瓦修復へ

—— 父親が瓦葺き職人をさせていて、それでこの世界に入られたと伺いましたが、まず瓦葺き職人になられた経緯からお話いただけますか。

山本—— 私は八人兄弟の四番目に生まれました。小学校のときは、ちょうど戦時中で、日本が一番貧しかった時代でした。戦後、長男は中国で足を負傷して帰ってきました。それで屋根に上る瓦葺きのような仕事ができなくなりました。次男は親父について見習いをするような年でなく、三男は工業学校を卒業後、近鉄に就職しました。それで結局、私が小学校高等科を卒業して一四歳のときに、親父について屋根瓦葺きの見習いを始めました。

親父には二十歳までついていました。昔は二十歳で職人は一人前になるというのが普通です。仕事をしているうちにだんだんと欲が出て、高度な仕事をしたくなり、親父の親方の息子さんの紹介で、二十歳から本瓦葺きの第一人者だった井上新太郎さんのもとで、文化財社寺瓦施工(本瓦葺き)の修行を始めました。

初めての仕事は、法隆寺金堂でしたが、親方は松本城もやっていたので、しばらく行ったり来たり生活でした。当時はみんな食べるのが精一杯のときで、民家の仕事は日当が千円でした。ところが、文化財の仕事は半分くらいでしたし、松本城はもっと安かったです。わたしは見習いやつたので、もっと安かったですね。親方のもとでは、六年間修行をさせてもらいました。そして一九

五七(昭和三二)年に独立し、親父のところへ戻って民家の屋根葺きをしたり、親方の仕事を手伝ったりしていました。

質の良い瓦をつくりたいと 瓦製造を始める

—— 自分で瓦を焼こうと思ったのは、どのようなきっかけだったのですか。

山本—— 昔は、瓦つくりと瓦葺き両方できて一人前だったんです。そんなことを千年以上受け継がれてきた瓦を葺いていると教えられました。しかし、今は「瓦屋」・「屋根屋」は分業です。先人に比べると、半人前ですわ。それに、あの頃は老舗の瓦屋が奈良にありました。が、「うんと焼いたこんな瓦が欲しい」と言うても、なかなかつくってもらえませんでした。

それで結局、自分で焼くことになりました。一九六三(昭和三八)年に会社をつくり、それまで瓦葺きのみでしたが、質の良い瓦をつくりたいということで、一九七〇(昭和四五)年に工場をつくりました。

それから本瓦葺きというのは、丈夫ですが変なことをすると直に傷みます。単に重ね合わせてもあかんのです。一般的には三枚重ねですが、東本願寺御影堂明治再建時は四枚重ねで、さらに耐震・耐風構造が施されています。瓦づくり・葺きともに現代ではお金をかけても不可能なほど完璧に近い技の数々です。しかし、仕事の緻密さが結果として屋根荷重を増大させることになり、構造上の問題が生じ、また瓦自身も凍害にあり、現在、明治職人の技を受け継ぎながら、経験に基づく

新たな知恵を加え、工事を進めているところだ。

—— 古代瓦の研究、復元にも取り組んでおられますが、古いものだと飛鳥時代の瓦で葺かれた屋根もあるとか。

山本—— 昔は、瓦は高価なものでしたから、捨てたりせずに、小さな建物や塀等に再利用したり、大事に何遍も使われてきました。だから、現在でも残っているのです。でも、今の世の中ではすべて廃棄です。飛鳥の時代がそんなんだつたら、何も残っておりません。

ものづくりは人づくりから

—— 最近、機械化されて、技の伝承も難しくなっているのではないですか。

山本—— 昔は道具から瓦、そして焼く窯まですべてが手づくりでしたが、四十年ほど前から機械化が進み、今では瓦をトラックに積み込むまですべてが機械化しているような状態です。さらに、JIS規格外の瓦は、その場で処分されているのです。このような状況がこれから先も続けば、手づくりの技術も、資源も失ってしまうこと

になります。

結局日本は機械だけが発達し、手先の器用さや働く勤勉さ、もつたいないという心までなくしてしまいました。それから消費は美德と言われ、流行ばかりを追い、伝統文化を大切にしなくなりまし。今、日本にも外国から多くの人が訪れますが、その目的は日本文化です。なかでも特に世界に誇れる木造建築があります。古来奈良の地は国際交流、それに伴う国（都）づくりの発祥地であり、現代に至るまで受け継がれてきた豊富な文化遺産があり、まさしく「日本の表玄関」です。それが、生駒から奈良に車で走らせても、主要道路の両脇はラーメン屋や自動車屋ばかり。歴代の知事には文化のわかる人がいない。今一度、国のあり方をもう一度考え直さないといいけません。

そして、文化財を守り、伝承していくには「職人も養成」ということにたどりつき、一九九一（平成三年）に「日本伝統瓦技術保存会」をつくりましたが、発足から現在までに会員の半分近くが廃業へと追い込まれています。三五年程前にも、これからは人の育成をし

ていかなければならないと、旧文化財保護委員会へ提言に行きましたが、「今は間に合っている。お前一人になったら儲かっていいやないか」と言われて、腹が立ちました。

自然のものを生かし、人間の手の技術を加えたものが、国宝や重要文化財、世界遺産に指定されているわけですが、これからも正しいものを残していこうと思っても、技術がそれについていかなければ、残っていきません。モミの種類は蒔いてこそ、次にまた芽が出てきます。けれど、蒔かずに食べってしまったら、もう稲穂を見ることはできません。だからこそ、仕事のないときにこそ人を育てていかなないと、間に合わなくなりますよ。修理はつかりするのでもいいですが、平成の国宝もつくっておかなければいけませんよ。江戸時代で日本の木造建築技術が止まっているようなものではあきません。

—— 本日はいろいろなお話をお聞かせいただきありがとうございます。

